

『苔の衣』作中和歌の類歌覚書

安 道 百 合 子

はじめに

『苔の衣』物語は四巻から成る作り物語である。成立は、『風葉和歌集』（一二七一年成立）に作中和歌が二首見えること、『無名草子』（二二〇〇年頃）には一切言及がないこと、の大きく二点を根拠としておよそ鎌倉前期とみられている。^{注1}

一般に、中世王朝物語の成立年代については、こうした指標となる作品内の引用、言及の有無のほかに、作品内の引歌表現など先行作品からの影響のありようを手がかりにして、成立下限をたどる。稿者は以前、そうした影響のありようを明らかにあたり、コンピュータを用いた二音一因子方式によって、作中和歌の類歌検索ならびに引歌検索の方法を試み、その報告をしたことがある。その際、コンピュータが網羅的に検索した結果には、人の意識しにくい偶発的な連続歌句が含まれるので、時代の好みや傾向を見るのに有効なのではないかと述べた。^{注2}

また、別稿にて、中世王朝物語の入水譚における「底の水屑」用例を検討した際、『苔の衣』の場合には、入水のモチーフと関わらない「底の水屑」表現を含む和歌があることを指摘した。本作の和歌の詠みぶりには、他の中世王朝物語と傾向を異にする場合もあるのである。本稿では、網羅的に、作中和歌の類似歌を提示し、『苔の衣』作中和歌の傾向を考察する材料としたい。

作中和歌の類歌掲出

以下に、類歌を掲出する。【 】内漢数字は、『苔の衣』作中和歌番号を新編国歌大観番号に従って示した。和歌本文は新編国歌大観により、私にすべてひらがなにした。コンピュータ処理に使用するデータはすべて清音にしたが、本稿では濁点を残した。二音一因子方式で、新編国歌大観所収のすべての和歌と比較した結果、15ポイント以上の和歌を●、11〜14ポイントの範囲で何らかの影響を認められそうな歌を○の記号を付して示し、歌のあとに

(一)で出典・国歌大観歌番号を記した。なお、見やすさの便宜上、類歌の本文は新編国歌大観の表記の通りとし、漢字を含む。コンピュータによる掲出結果は、本来は網羅的に全てを掲げるべきだが、11・14ポイントの歌は膨大な数になるので、選択した。そのうち『中世王朝物語全集 苔の衣』(以下、全集と略す)に「による」「と関連あるか」などの注記がある出典・歌には、★を付す。二音一因子方式ではあがらなかった歌で、全集にのみ指摘がある場合は、歌の頭に★を付ける。その際、全集の和歌本文が、冒頭に掲げる本文と大きく異なる場合は、全集の和歌本文を並記した。また、『風葉集』所収歌二首には【】の上に◎を付した。

【一】かひありとなくしかのねのごとならばなほかへりこんあふさかのせき

★かへりこんまたあふさかとたのめども別はとりのねぞなかれる(続古今和歌集889)

【六】いまはただひるまなまちそうめがえのひらけぬえだにきるるうぐひす

○梅がえにきるるうぐひすはるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ(古今和歌集5・新撰和歌19・古今和歌六帖441・和歌十体11・奥儀抄121・井蛙抄128・定家八代抄31・色葉和難集108・源氏物語古注釈書引用和歌288ほか)

【七】さきやらぬうめにこづたふうぐひすやひるまのほどはまばゆかるらん(全集・咲きやらぬ梅に木伝ふ鶯も屋間のほどやまばゆからまし)

★あふことの夜をし隔てぬ仲ならばひるまも何かまばゆからまし(源氏物語18)

【八】ありそうみのはまのまさごはかひぞなききみがよはひのかずにおされて

○有そ海の浜のまさごたとのめしは忘るる事のかずにぞ有りける(古今和歌集818・新撰和歌286・五代集歌枕926・歌枕名寄7491)

●よろづよのなにおふはまのまさごをばきみがよはひのかずにかぞへむ(大嘗会悠紀主基和歌17)

○ありそうみのはまのまさごをみなもがなひとりぬるよのかずにとるべく(後拾遺和歌集796・相模集10・五代集歌枕931・歌枕名寄7494)

○渡つ海の浜のまさごをかぞへつつ君がちとせのありかずにせむ(古今和歌集347・新撰和歌163)

○君が代は浜のまさごの数ごとに千とせをのぶるよはひなるらん(嘉元百首2000)

【九】かずしらぬはまのまさごもつきぬなりたれにとはましきみがちとせを

○かずしらぬはまのまさごにすむつるは君がやちよのあとやとむ

らん (為家千首844)

【一〇】 なきひとのけふりやそれとなかむれはゆきけのくももな
つかしきかな

●見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな (★源
氏物語86)

●亡き人の煙はそれと見えねどもなべて雲井のなつかしきかな

(★狭衣物語88)

●なき人の行へやそれとながむればけぶりもゆかしくももなつか
し (挙白集 (長嘯子) 1962)

【一一】 のいのできみがためにとおもふにはわらびをるてもあ
つからぬかな

★君がため春ののいのでわかなつむわが衣手に雪はふりつつ
(古今和歌集21)

【一二】 いまはとてわかれしくれにけふはまたたちかへりつつも
のやかなしき (全集・限りとて別れし暮に今はまたたち帰り
つつものや悲しき)

★かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり (源
氏物語1)

【一四】 よそにのみおもひしものをあかつきのわかればげにぞつ
ゆけかりける

★あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな
(源氏物語135)

○よそにのみおもひし物をめにちかき人をこふるもこひにざりけ
る (重之女集76)

○うしとのみ思ひしものをあか月のゆふつけ鳥はいまぞ恋しき
(続後撰和歌集979・秋風和歌集977)

○よそにのみ思ひしものをよこ雲も袖のわかれのしののめの空
(為尹千首616)

【一八】 うゑおきしかきほあれにしとこなつのはなをあはれとた
れかみざらん 【一九】 かきほあれとふひとまなきとこなつ
はおきふしごとにつゆぞこぼるる (贈答歌)

★山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露・咲
きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞ
なき (源氏物語14・15)

○しのぶべきひとなき身こそ悲しけれ花をあはれと誰かみざらん
(赤染衛門集307)

【二〇】 ながしとはだれかいひけんあきのよもねぬにあげぬとわ
れはなげくに

○時鳥待つは久しき夏の夜を寝ぬに明けぬと誰かいひけむ (★千
載和歌集148・和漢兼作集14・題林愚抄1784)

【二一】 まどろまであけゆくそらをながめつつはかなくきゆるわ
がみともがな

★見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身とも
がな (源氏物語80)

【二】うぐひすのふるすをいでておなじくはこのむめがえにねぐらさだめよ

○さきそむるわか木のむめにうぐひすのいく世のはるかねぐらさだめむ(実材母集475)

◎【二五】おもひやれはれまもみえぬさみたれにとはてほとふるそでのしづくを(風葉和歌集1078)

●おもひやれとはでひをふるさみだれのひとりやどもるそでのしづくを(金葉和歌集二度本406肥後/金葉和歌集三奏本415/堀河院艶書合25/肥後集206)

【二八】かきつめてころまどはすみづくきはあとみるからにかなしかりけり

○なき人のかきとどめけるみづくきはうちみるよりぞかなしかりける(伊勢集451)

○みづくきのあとをあはれとみるからにわがなみださへかきぞやられぬ(実材母集292)

【二九】あさつゆにしをれふしたるをみなへしおきゐつるまはなほぞこひしき

○あさ露にしをれはすともをみなへしおぼろけならぬ人にをらすな(風葉和歌集239)

○けさはなほしをれぞまさるをみなへしおきける露の名残ぞ(石清水物語6)

【三〇】をみなへしおきゐつるまのつゆけさにしをれふしつつき

えぬべきかな

★吹きみだる風のけしきに女郎花しをれしぬべき心地こそすれ(源氏物語87)

【三五】おもひわびきえなましかばことのおとのしらめをまたはきかずやあらまし

●おもひわびきえなましかば人とふとつゆばかりだにいららずやあらまし(秋風和歌集900)

【三七】はかなくてかきはあれぬとなでしこにつゆのあはれはかけざらめやは

○山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露(★源氏物語4・風葉和歌集1189)

【三八】ちよまでとちぎりしなかのめにちかくおぼろのしみづたえやはてなむ

★目に近く移ればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな(源氏物語43)

【四三】いつまでかよそにてもみんともすればきえをあらそふはぎのしたつゆ

★ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな(源氏物語517)

○いつまでかよそにもきかむともすればみにしみぬべきやまのあらしを(物語二百番歌合339・風葉和歌集116)

【四八】みるごとにあはれつきせぬたづのこにとびわかるるはな

ほぞかなしき

○それゆゑにとびわかれてもあしたづの子をおもふかたはなほぞかなしき (十六夜日記103)

【四九】 なきひとをこふるなみだのつもりゐてちしほのいろにそむるもみぢば

○色ふかき袖の涙にならふらし千しほ八千しほ染むる紅葉ば (新拾遺和歌集272)

○いにしへをこふるなみだの色にてたもとにちるはもみぢなりけり (山家集(西行) 795)

○雨と降る涙の色やこれならん袖よりほかにそむる紅葉ば (増鏡113)

【五一】 なきひとをこふるなみだときくからにちしほにいろもえまさるかな

○なき人をこふる涙のやがてまた身をなげくにも成りにけるかな (統門葉和歌集863)

【五二】 ゆめにだにまどろまれねばなきたまのありかをことみぬぞかなしき

○おもひやるかたこそなけれゆめにだにたまのありかをことしらねば (高倉院昇霞記123)

○さてもなほたまのありかをそこしるまぼろしだにもなきやかなしき (実家集403)

【五四】 うゑおきしひとはなくともひめこまついまはくもるにお

ひのぼらなん【五五】 ひめこまつひくひとなくとくもるまでおひのぼりなんことをしぞおもふ

○雲井まで生ひのぼらなん種まきし人も尋ねぬ峰の若松 (狭衣物語57・無名草子44・物語二百番歌合138)

○たねまきし人も尋ねぬ姫こ松おひ行く末ぞ誰かみるべき (石清水物語13)

【五八】 あふせあらばなみだのかはにみをなげてそのもくづとなりもしなまし

○恋ひわたる涙の川にみをなげんこの世ならでもあふせありやと (★千載和歌集115・新中将家歌合98)

●淵となる涙の川に身をなげてかこちやせまし後のあふせを (龜山殿五首歌合61)

【六〇】 でのやまこえてやきつるほととぎすわかれしひとのゆくへをしへよ

●でのやまこえてきつらんほととぎすこひしき人のうへかたらなん (伊勢集27・拾遺和歌集307・拾遺抄270・和歌童蒙抄738・奥儀抄458・袖中抄467・宝物集294・古今和歌集古注釈書引用和歌38・伊勢物語古注釈書引用和歌292・源氏物語古注釈書引用和歌1766)

●での山こえてくるなるほととぎすわがおもふ人のゆくへかたらへ (隣女集(雅有) 407)

●ほととぎすけふは待つかなしでの山こえにし人の行へかたれと

(隣女集(雅有) 2586)

【六一】 たなばたのあふせをみてもかなしきはかぎりもしらぬわかれなりけり

●よそにてもきけばたのもしかなしきはそこもしらぬわかれなりけり (大齋院前の御集310)

○夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり (源氏物語578・物語二百番歌台341・風葉和歌集201)

★たなばたの逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれのにはに露ぞおきそふ (源氏物語579)

●けさはわが身にしられてもかなしきは七夕つめのわかれなりけり (隣女集(雅有) 456)

【六二】 みるからにしのおぞしげるいにしへをわするるくさとたれかいひけん

★忘れ草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまむ (伊勢物語176・大和物語271)

【六三】 わするとはかなしきことをかくばかりおもはぬひとやいひはじめけん

○なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢みぬ人やいひけん (建礼門院右京大夫集233)

○かくばかりおもはぬやまにしろくものかかりそめけむことぞくやしき (斎宮女御集108)

【六四】 みるたびにかなしきものはしでのやまこえにしひとのみ

づぐきのあと

○みるたびにいとどなみだぞながれそいまはかぎりの水ぐきのあと (実材母集242)

【六五】 わかれにしひとをこふるにいとどしくかなしきそふるあきのくれかな

○なれきにし都もうとく成りはててかなしきそふる秋のくれかな (山家集(西行) 1045・雲葉和歌集729)

【六六】 かなしきもくれゆくあきもいとどしくとふことのはにつゆぞおきそふ

○おくれゐてなげくたもとをあはれともとふことのはにつゆぞおきける (林下集(実定) 264)

○かなしきをとふもかしこきことのはにのこるははそのつゆぞおきそふ (実材母集283)

◎【六七】 をぐらやまみねのもみぢばいろづきぬなげきのみこそときはなりけれ (風葉和歌集1229)

○小倉山峯のもみぢば心あらば今ひとたびのみゆきまたなん (★拾遺和歌集1128・拾遺抄115・百人秀歌34・百人一首26・六百年陳状11・大和物語17・定家八代抄82・八代集秀逸29・五代集歌枕7・歌枕名寄716)

【六九】 ありあけのつきもろともにすみなれしくものうへをばいまでいでぬる

●ありあけの月もろともにいでしよりこころはくものうへにとめ

つき(林下集(実定)301)

○おもひいづや雲井の月よもろともにすみなれし世は恋しきものを(伏見院御集1655)

【七一】ありはてぬかりのやどりをふりすててまことのみちにたづねいるかな

○いとふべきかりの宿りは出でにけり今はまことの道を探ねよ(月詣和歌集889・玉葉和歌集8479・西行法師家集639)

【七二】いろいろにそめしたもとをいまはとてこけのころもにたちぞかへつる

○なれみてし花の袂をうちかへしりの衣をたちぞかへつる(新古今和歌集1711・御堂関白集(道長)61)

【七三】たにふかみかかるとすみかもうぐひすのこゑはみやこにかはらざりけり

★谷ふかみ春の光のおそければ雪につつめる鶯の声(新古今和歌集1441)

○うぐひすのこゑはみやこにふりにけりふるすはいまだ雪もけなくに(明日香井和歌集(雅経)297)

○ゆくままにさかひはあらずなりぬれどはなはみやこにかはらざりけり(重家集303)

○みるままにあらずなり行く山路にも空は都にかはらざりけり(正治初度百首1088・夫木和歌抄1688)

○岩代の岡のかやねにむすぶ夜も夢は都にかはらざりけり(玉治

百首3819・歌枕名寄8583)

【七四】ひとしれずおもひしのびてけふやさはふかきころのほどをしらせん

○いろにいでて今ぞしらするひとしれずおもひわびつるふかき心を(新勅撰和歌集638・本院侍従集1)

【七七】みつせがはいまひとたびのあふせだにおもひたえたるなかぞかなしき

★三瀬川後の逢ふ瀬は知らねども来む世をかねて契りつるかな(とりかへばや物語70)

●この世にて絶えはてぬともみつせ川今一たびのあふせあらじや(風葉和歌集1039)

【七八】あふさかもこゆともなくてたちかへりさもふみまどふいもせやまかな

★ひめこまつ木だき陰のしげるまでみちまどひけるいもせ山かな・みちしらずたれもまどひしいもせ山君にぞふかきちぎりなりける(我が身にたどる姫君168・169)

【七九】たねまきしひとをわするなくもゐるまでおひのほるへきみねのわかまつ

●雲井まで生ひのぼらなん種まきし人も尋ねぬ峰の若松(狭衣物語57・無名草子4・物語二百番歌合38)

●雲井までおひのぼるべきわか松をみてもしづえをおもひわするな(海人の刈藻2)

○雲のまで生ひのぼるべきわか松のこや枝かはすはじめなるらん
(風葉和歌集729)

○たねまきしゆくへもしらぬなでしこのはのあたりをたづねてもみよ (あきぎり30)

○たねまきしひとしきかねはあれぬともときはにほへなでしこの花 (むぐら12)

【八一】ともすればきをあらそふつゆのみをいまいくよとてたのめおくらん

○やもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな (★源氏物語557・風葉和歌集631)

【八四】あすかがはあすをあふせとおもふにもよるのへだてにみぞうきぬべき

★飛鳥川あすとあふせを契るにぞまたよどむべき物としりぬる
(林葉和歌集883)

○飛鳥川あす渡らんと思ふにも今日のひるまはなほぞ恋しき (狭衣物語31)

【八七】うきながらかなしきものはいまはとてなれにしさとをいづるなりけり

●たぐひなくかなしき物はいまはとてまたぬゆふべのながめなりけり (続後撰和歌集962・万代和歌集2702・和泉式部続集124)

○うきながらさすがにものかなしきはいまはかぎりとおもふ

なりけり (詞花和歌集256・新古今和歌集2003・後葉和歌集392・元輔集230・清慎公集(実頼) 85・三十人撰97・三十六人撰111)

【八九】われもしかなきてぞあかすあきのよをわかれしひとをこふるなみだに

★我もしかなきてぞ人にこひられしいまこそよそにこそをのみきけ (大和物語263)

【九〇】かたみぞとみるにこころはなぐさまでみだれぞまさるいもがくろかみ

○をみなへしみるに心はなぐさまでいとどむかしの秋ぞこひしき (★伊勢集70・古今和歌六帖2908・新古今和歌集782・和漢朗詠集281)

★くろかみのみだれもしらずうちふせばまづかきやりし人ぞ恋しき (和泉式部集86)

○よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花 (源氏物語88・風葉和歌集196)

○忍ぶ草見るに心は慰まで忘れ形見に漏る涙かな (狭衣物語103・物語二百番歌合158)

○ゆかりぞと見るに心は慰まで袖こそぬらせ若草の露 (白露)

【九五】おくれなばものしづくにたりつつよはのつきをもちかがみるべき (全集・遅るとももの雫の例にて夜半の月をもいかが見るべき)

★すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん（遍昭集5・新古今和歌集157）

【九八】このよにはさすがにふかきちぎりにてあはでわかれしことのかなしき

○今一めよそにやはみんこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ（浜松中納言物語9）

【九九】みをかへてまことのみちにいりぬれどなほこのやみにまどひぬるか

○人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるか
な（後撰和歌集1102・兼輔集127・前十五番歌合11・三十人撰53・三十六人撰67・深窓秘抄86・定家八代抄1481・源氏物語古注釈書引用和歌662ほか）

作品内での類歌

①贈答歌

●【二九】あさつゆにしをれふしたるをみなへしおきぬつるまはなほぞこひしき

●【三〇】をみなへしおきぬつるまのつゆけさにしをれふしつべきえぬべきかな

●【四〇】かなしさはつきせじものをたらちをのかたみのころもけふはぬぐとも

●【四一】たらちをのかたみのころもぬぐからにかなしきことはけふぞつきせぬ

ほかに、【四】かひありてかづくたまものかぎりなくちいろのそこのためしとやみん【五】かひありてかづくたまもにうちそふるこのおおうみぞかぎりしられぬ、【三八】【三九】よしやみよおなじこのよにすみながらおぼろのしみづたえやはつると、【四九】【五一】【五四】【五五】も贈答歌である。これらはひとまず贈答ゆえの歌句の一致と捉えておきたい。

②贈答歌以外

作品内の離れた場所、別人の詠で、類似が見える場合がある。

【一六】とはでのみあはぬたえまをなげくにはこころぞゆきてふりくらしける

【二六】とはでのみほどはふれどもよともにあはぬたえまをなげくとをしれ

【一五】おきいづるあかつきつゆにそほちつわがみもともにきえぬべきかな

【三〇】をみなへしおきぬつるまのつゆけさにしをれふしつべきえぬべきかな

【四三】いつまでかよそにてもみんともすればきえをあらそふは
ぎのしたつゆ

【八一】ともすればきえをあらそふつゆのみをいまいくよとてた
のめおくらん(注)

【五三】みしひともこふるなみだもかなしさもいのちもけふにか
ぎりてしかな

【七五】けふやさはわかればてぬるおなじくはいのちもともにか
ぎりてしかな

【五五】ひめこまつひくひとなくとくもゐるまでおひのぼりなんこ
とをしぞおもふ

【七九】たねまきしひとをわするなくもゐるまでおひのぼるべきみ
ねのわかまつ

おわりに

以上、『苔の衣』作中和歌の類歌、ならびに、作中和歌相互の類歌を掲出した。作中和歌相互の類似では、【一六】と【二六】、【一五】と【三〇】など、別人がはなれた別の場面で詠んでいる歌同士の偶然の一致と思われる例もあり、それらは作者の力量をさぐることにふなりそうだが、またその一方、主人公苔の衣大将の和歌として、【二八】かきつめてこころまどはずみづぐきはあ

とみるからにかなしかりけり、【六〇】しでのやまこえてやきつるほととぎすわかれしひとのゆくへをしへよ、【六四】みるたびにかなしきものはしでのやまこえにしひとのみづぐきのあと、は離れていても、同一人の歌ゆえの、発想の類似と捉えることも可能で、ともに『実材母集』所収歌との類似が指摘できる。また、【九〇】「みるにこころはなぐさまで」は、『源氏』『狭衣』『白露』がそれぞれ「みる」対象を遣児（あるいはそれを象徴する草花）ととらえているのに対し、「いもがくるかみ」としたのが意外であるとともに、巻四兵部卿宮の物語においては、ここで彼が「みる」のが出家してしまった女御の髪である方が、巻三に至るまでの苔の衣大将の物語との対照性が際立つという、新たな意味付けを見出すこともできよう。

全体を通して、鎌倉期の歌集だけではなく、時代の下る作品や、作り物語の和歌も多く見える。【七九】「たねまきし」では、中世王朝物語によくある悲恋のモチーフを持つ作品の和歌が並ぶ。こうした作品と、構想レベルで比較しても、作中和歌としての有機的な意義付けができるかどうか、また引き歌としての認定をどこまでできるか、を引き続きの課題としたい。

注

(一) 小木喬『鎌倉時代物語の研究』(東寶書房1988)は入集歌数の少なさから『風葉集』直前の成立とされる。今井源衛『中世王朝物

語全集七 苔の衣』笠間書院1996)はその解題において、【八四】番歌の引歌を『林葉集』883歌とするなら1271年までの二、三十年となり、【二】番歌の引歌を『続古今集』899歌とするなら文永二年(1265)〜同八年(1271)となる可能性を示された。また、異説として、山田和則『苔の衣』成立論―改作仮設と二条太皇太后宮礼令子サロンー(『国語と国文学』第一一〇号2007)は、『風葉集』所収【二五】番歌の考証により、古本『苔の衣』の存在を想定されたうえで、古本の成立は『艶書合』前後に遡る可能性と肥後が作者である可能性を示された。

(2) 二音一因子方式は中村康夫氏考案のコンピュータによる類似歌検索の方法で、連続した二音を一つの因子(ポイント)として文字列の一致度を測る方法である。拙著『文系のための情報処理入門』(中村康夫共著・和泉書院2008)において、解説し、類歌検索のプログラムを紹介した。また拙稿「コンピュータは引用表現を探せるか―「中世物語『あきぎり』の引歌表現」(梅光学院大学『論集』第43・44号2010・2011)などにおいて、類歌検索ならびに引歌表現検索の成果についても報告した。和歌の比較においては、15ポイント以上一致する場合は、具体的な影響関係が想定され、11〜14ポイントで広く類似歌が抽出される。

(3) 拙稿「中世王朝物語における「底の水層」表現の検討―入水譚の変容をたどりつゝ『国語の研究』第四四号(大分大学国語国文学会2019)

(4) 注(1) 今井源衛朗掲書の注記には指摘がないが、解題において成立年次考察の際、引歌の可能性を示されたので、便宜上★を付した。

(5) 関本真乃『苔の衣』の大将の主人公性(『国語国文』第八二巻第七号2013、『嵯峨院時代の物語の研究―『石清水物語』『苔の衣』―』和泉書院2018所収)は当該歌に関して、『古今集』遍昭歌ではなく、道長詠に拠った蓋然性が高いとされ、「苔の衣大将の系譜は、道長の息という共通項に基づき、顕信と頼通という異母兄弟二人の系譜を集約して下敷きしている」と論じられた。

(6) 辛島正雄「『苔の衣』の御仲らひ」再考―『苔の衣』読解のための覚書―(『中世王朝物語の新研究―物語の変容を考える』新典社2007所収)は、本作が冒頭に提示された主題追求においてすぐれて構築的であることを論じられた。従来問題とされがちであった冬の巻の構想を明らかにする過程において、【七九】と【五四】【五五】番歌との響きあい、【四三】と【八一】【八二】番歌の対応についても詳細に読み解いておられる。